

有島武郎作

# 一房の葡萄

朗読

石原広子

第一卷 1. 有島武郎「一房の葡萄」

有島武郎（ありしま たけお）

1878年（明治11）・1923年（大正12）。東京生まれ。



父は大蔵省の官吏で、弟に画家、作家の有島生馬、作家の里見弴がいる。学習院中等科を経て札幌農学校に進みキリスト教に入る。米國留学後、武者小路実篤、志賀直哉らと「白樺」派に同人として参加。「カインの末裔」「或る女」など「本格的なリアリズムの手法で鋭く自我を語り大正文学の一つの頂点を示した」とされる。一方、有産階級の知識人がいかに生きるかを真摯に苦悩し、北海道の農場を解放したりした。代表作には他に「小さき者へ」「生まれ出る悩み」「惜しみなく愛は奪ふ」などがあり、児童文学に「一房の葡萄」の他に「溺れかけた兄妹」「碁石を飲んだ八つあん」「火事とぼち」もある。

「一房の葡萄」は、1920（大正9）年8月に「赤い鳥」に発表された。

西洋人の住む町の小学校に通う「僕」は、同級生の絵具を盗んでしまう。それを知った先生は強く叱ろうともせず、葡萄蔓から葡萄をもぎとり「僕」の膝にのせる。良心に苛まれる内気な少年と、西洋人女性教師の包容力を暖かく描く。この作品について、文芸評論家は「有島は自己の幼児体験を踏まえながら、子どもの眼を通して子どもの心理をリアルに描き、説話的な作品ないし詩的メルヘンをしか書き得なかったこの時代にリアリズム童話の可能性を示した」（千葉俊二「日本児童文学名作集・上」）と評している。

「用語解説」

石板（せきばん） 粘板岩の薄板に木製の枠をつけ、石筆（せきひつ）で文字や絵などを書くようにしたもの。学童の練習用に使われた

僕は小さい時に絵を描くことが好きでした。僕の通っていた学校は横浜の山の手と  
いう所でしたが、そこいらは西洋人ばかり住んでいる町で、僕の学校も教師は西洋  
人ばかりでした。そしてその学校の行きかえりにはいつでもホテルや西洋人の会社などが  
ならんでいる海岸の通りを通るのです。通りの海添いに立って見ると、真青な海の上  
に軍艦だの商船だのが一ぱいならんでいて、煙突から煙の出ているのや、  
万国旗をかけたわたしたのやがあつて、眼がいたいように綺麗でした。僕はよく岸に立つて  
その景色を見渡して、家に帰ると、覚えていてるだけを出るだけ美しく絵に描いて見よ  
うとしました。けれどもあの透きとおるような海の藍色と、白い帆前船などの水際近  
くに塗つてある洋紅色とは、僕の持っている絵具ではどうしてもうまく出せません  
でした。いくら描いても描いても本当の景色で見るような色には描けませんでした。

ふと僕は学校の友達の持っている西洋絵具を思い出しました。その友達は矢張西洋人で、しかも僕より二つ位とし年齢が上でしたから、身長は見上げるように大きい子でした。ジムというその子の持っている絵具は舶来の上等のもので、軽い木の箱の中に、十二種いろの絵具が小さな墨のように四角な形にかためられて、二列にならんでいました。どの色も美しかったが、とりわけて藍と洋紅とは喫驚びっくりするほど美しいものでした。ジムは僕より身長が高いくせに、絵はずっと下手へたでした。それでもその絵具をぬると、下手な絵さえがなんだか見ちがえるように美しく見えるのです。僕はいつでもそれを羨うらやましいと思っていました。あんな絵具さえあれば僕だって海の景色を本当に海に見えるように描かいて見せるのになあ

と、自分の悪い絵具を恨みながら考えました。そうしたら、その日からジムの絵具がほしくってほしくってたまらなくなりました。けれども僕はなんだか臆おくびよう病びょうになってパパにもママにも買って下さいと願う気になれないので、毎日々々その絵具のことを心の中で思

いつづけるばかりで幾日か日がたちました。

今ではいつの頃ころだったか覚えてはいませんが秋だったのでしよう。葡萄ぶどうの実が熟して

いたのですから。天気は冬が来る前の秋によくあるように空の奥の奥まで見すかされそうに霽はれわたった日でした。僕達は先生と一緒に弁当をたべましたが、その楽しみな弁当の

最中でも僕の心はなんだか落着かないで、その日の空とはうらはらに暗かったのです。僕

は自分一人で考えこんでいました。誰たれかが気がついて見たら、顔も屹きつ度青きかったかも知

れません。僕はジムの絵具がほしくってほしくってたまらなくなってしまうたのです。胸

が痛むほどほしくなってしまったのです。ジムは僕の胸の中で考えていることを知っている

るにちがいないと思つて、そつとその顔を見ると、ジムはなんにも知らないように、面白

そうに笑つたりして、わきに坐すわっている生徒と話はなしをしているのです。でもその笑つて

いるのが僕のことを知つていて笑つているようにも思えるし、何か話をしているのが、「い

まに見ろ、あの日本人が僕の絵具を取るにちがいないから。」といているようにも思えるのです。僕はいやな気持ちになりました。けれどもジムが僕を疑っているように見えれば見えるほど、僕はその絵具がほしくてならなくなるのです。

僕はかわいい顔はしていたかも知れないが、からだ体も心も弱い子でした。その上、おくびょうもの臆病者で、言いたいことも言わずにすますようなたち質でした。だからあんまり人から

は、かわいがられなかったし、友達もない方でした。昼御飯がすむと他ほかの子供達は活かっぱつ潑うんどうばに運動場に出て走りまわって遊びはじめましたが、僕だけはなおさらその日は変に心が沈んで、一人だけきょうじょう教場はいに這入っていました。そとが明るいだけに教場の中は暗くなつて僕の心の中のようなでした。自分の席に坐すわつていながら僕の眼は時々ジムのタイプル卓タイプルの

方に走りました。ナイフで色々ないたずら書きが彫りつけてあつて、手垢てあかで真黒まっくろになつてゐるあの蓋ふたを揚あげると、その中に本や雑記帳や石板せきばんと一緒にあつて、飴あめのような木の色の絵具箱があるんだ。そしてその箱の中には小さい墨のような形をした藍や洋紅の絵具が……僕は顔が赤くなつたような気がして、思わずそっぽを向いてしまうのです。けれどもすぐ又横眼またでジムの卓テーブルの方を見ないではいられませんでした。胸のところかどきどきとして苦しい程ほどでした。じつと坐つていながら夢で鬼にでも追いかけられた時のように気ばかりせかせかしていました。

教場に這入はいる鐘がかんかんと鳴りました。僕は思わずぎよつとして立上りました。生徒達が大きな声で笑つたり呶鳴どなつたりしながら、洗面所の方に手を洗いに出かけて行くのが窓から見えました。僕は急に頭の中が氷のように冷たくなるのを気味悪く思いながら、ふらふらとジムの卓テーブルの所に行つて、半分夢のようにその蓋を揚げて見ました。そこに

は僕が考えていたとおり雑記帳や鉛筆箱とまじって見覚えのある絵具箱がしまっておりま  
した。なんのためだか知らないが僕はあつちこちを見廻みまわしてから、誰も見ていないと思  
うと、手早くその箱の蓋を開けて藍と洋紅との一二色ふたいろを取上げるが早いかポケットの中  
に押し込みました。そして急いでいつも整列して先生を待っている所に走って行きました。

僕達は若い女の先生に連れられて教場に這入り銘々の席に坐りました。僕はジムがどん  
な顔をしているか見たくってたまらなかつたけれども、どうしてもそつちの方をふり向く  
ことができませんでした。でも僕のしたことを誰も気のついた様子がないので、気味が悪  
いような、安心したような心持ちでいました。僕の大好きな若い女の先生の仰おっしゃること  
なんかは耳に這入りは這入ってもなんのことだかちつともわかりませんでした。先生も  
時々不思議そうに僕の方を見ているようでした。

僕は然しかし先生の眼を見るのがその日に限ってなんだかいやでした。そんな風で一時間



がたちました。なんだかみんな耳こすりでもしているようだと思いながら一時間がたちました。

教場を出る鐘が鳴ったので僕はほっと安心して溜息ためいきをつきました。けれども先生が行ってしまおうと、僕は僕の級きゆうで一番大きな、そしてよく出来る生徒に「ちよつとこつちにお出いで」と肱ひじの所を掴つかまれました。僕の胸は宿題をなまけたのに先生に名を指さされた時のように、思わずどきんと震えはじめました。けれども僕は出来るだけ知らない振りをしていなければならないと思って、わざと平気な顔をしたつもりで、仕方なしに運動場うんどうばの隅すみに連れて行かれました。

「君はジムの絵具を持ってきているだろう。ここに出し給たまえ。」

そういってその生徒は僕の前に大きく拡ひろげた手をつき出しました。そういわれると僕はかえって心が落着いて、

「そんなもの、僕持ってやしない。」と、ついでたらめをいってしまいました。そうすると  
三四人の友達と一緒に僕の側そばに来ていたジムが、

「僕は昼休みの前にちゃんと絵具箱を調べておいたんだよ。一つも失くなってはいなかつ  
たんだよ。そして昼休みが済んだら二つ失くなっていたんだよ。そして休みの時間に教場  
にいたのは君だけじゃないか。」と少し言葉を震わしながら言いかえました。

僕はもう駄目だめだと思うと急に頭の中に血が流れこんで来て顔が真赤まっかになったようでした。  
すると誰だったかそこに立っていた一人がいきなり僕のポケットに手をさし込もう  
としました。僕は一生懸命にそうはさせまいとしましたけれども、多勢たせいに無勢ぶせいで逆とても叶  
いません。僕のポケットの中からは、見る見るマール球だま（今のビー球だまのことです）  
や鉛のメンコなどと一緒に二つの絵具のかたまりが掴み出されてしまいました。「それ見  
ろ」といわんばかりの顔をして子供達は憎らしそうに僕の顔を睨にらみつけました。僕の体からだ

はひとりでにぶるぶる震えて、眼の前が真暗まっくらになるようでした。いいお天気なのに、みんな休時間を面白そうに遊び廻っているのに、僕だけは本当に心からしおれてしまいました。あんなことをなぜしてしまったんだろう。取りかえしのつかないことになってしまった。もう僕は駄目だ。そんなに思うと弱虫だった僕は淋さびしく悲しくなって来て、しくしくと泣き出してしまいました。

「泣いておどかしたって駄目だよ」とよく出来る大きな子が馬鹿にするような憎みきったような声で言って、動くまいとする僕をみんなで寄ってたかって二階に引張って行こうとしました。僕は出来るだけ行くまいとしたけれどもとうとう力まかせに引きずられてはしごだん階子段を登らせられてしまいました。そこに僕の好きな受持ちの先生の部屋へやがあるので。

やがてその部屋の戸をジムがノックしました。ノックするとは這入はいってもいいかと戸を

たたくことなのです。中からはやさしく「お這入り<sup>はい</sup>」という先生の声が聞こえました。僕はその部屋に這入る時ほどいやだと思ったことはまたありません。

何か書きものをしていた先生はどやどやと這入って来た僕達を見ると、少し驚いたようでした。が、女の癖に男のように頸<sup>くび</sup>の所でぶつりと切った髪の毛を右の手で撫<sup>な</sup>であげながら、いつものとおりのやさしい顔をこちらに向けて、一寸首<sup>ちよつと</sup>をかしげただけで何の御用という風をしなさいました。そうするとよく出来る大きな子が前に出て、僕がジムの絵具を取ったことを委<sup>くわ</sup>しく先生に言いつけました。先生は少し曇った顔付きをして真面目<sup>まじめ</sup>にみんなの顔や、半分泣きかかっている僕の顔を見くらべていなさいましたが、僕に「それは本当ですか。」と聞かれました。本当なだけけれども、僕がそんないやな奴<sup>やつ</sup>だということはどうしても僕の好きな先生に知られるのがつらかったのです。だから僕は答える代りに本当に泣き出してしまいました。

先生は暫しばらく僕を見つめていましたが、やがて生徒達に向って静かに「もういつてもようございます。」といって、みんなをかえしてしまわれました。生徒達は少し物足らなそうにどやどやと下に降りていってしまいました。

先生は少しの間なんとも言わずに、僕の方も向かずに自分の手の爪を見つめていましたが、やがて静かに立って来て、僕の肩かたの所を抱きすくめるようにして「絵具はもう返しましたか。」と小さな声で仰おっしゃいました。僕は返したことをしっかり先生に知ってもらいたいので深々と頷うなずいて見せました。

「あなたは自分のしたことをいやなことだっと思ったと思いますか。」

もう一度そう先生が静かに仰った時には、僕はもうたまりませんでした。ぶるぶると震えてしかたがない唇くちびるを、噛かみしめても噛みしめても泣声が出て、眼からは涙がむやみに流れて来るのです。もう先生に抱かれたまま死んでしまいたいような心持ちになってし

まいりました。

「あなたはもう泣くんじやない。よく解わかつたらそれでいいから泣くのをやめましょう、ね。次ぎの時間には教場に出ないでもよろしいから、私わたくしのこのお部屋に入らっしゃい。

静かにしてここに入らっしゃい。私が教場から帰るまでここに入らっしゃいよ。いい。」と仰りながら僕を長椅子ながいす すわに坐らせて、その時また勉強の鐘がなつたので、机の上の書物を取り上げて、僕の方を見ていられましたが、二階の窓まで高く這は上あがった葡萄蔓ぶどうづるから、一房ひとつぶさの西洋葡萄をもぎって、しくしくと泣きつづけていた僕の膝ひざの上にそれをおいて静かに部屋を出て行きなさいました。

一時いちじがやがやとやかましかつた生徒達きょうじようはみんな教場はいに這入はいって、急にしんとするほどあたりが静かになりました。僕は淋さびしくって淋しくってしようがない程ほど悲しくなり

ました。あの位好きな先生を苦しめたかと思うと僕は本当に悪いことをしてしまったと思  
いました。葡萄<sup>ぶどう</sup>などは<sup>とて</sup>逆も喰<sup>た</sup>べる気になれないでいつまでも泣いていました。

ふと僕は肩を軽くゆすぶられて眼をさましました。僕は先生の部屋<sup>へや</sup>でいつの間にか泣寝  
入りをしていたと見えます。少し<sup>や</sup>痩せて身長<sup>せい</sup>の高い先生は笑顔<sup>えがお</sup>を見せて僕を見おろしてい  
られました。僕は眠ったために気分がよくなって今までであったことは忘れてしまつて、少  
し恥しそうに笑いかえしながら、慌<sup>あわ</sup>てて膝の上から<sup>すべ</sup>こり落ちそうになっていた葡萄の房  
をつまみ上げましたが、すぐ悲しいことを思い出して笑いも何も引込んでしまいました。

「そんなに悲しい顔をしなくてもよろしい。もうみんなは帰つてしまいましたが、あな  
たはお帰りなさい。そして明日<sup>あす</sup>はどんなことがあつても学校に来なければいけませんよ。

あなたの顔を見ないと<sup>わたくし</sup>私<sup>わたし</sup>は悲しく思いますよ。屹<sup>きつと</sup>度ですよ。」

そういつて先生は僕のカバンの中にそつと葡萄の房を入れて下さいました。僕はいつも

のように海岸通りを、海を眺めたり船を眺めたりしながらつまらなく家に帰りました。<sup>なが</sup>  
そして葡萄をおいしく喰べてしまいました。

けれども次の日が来ると僕は中々学校に行く気にはなれませんでした。お腹が痛くなればよいと思ったり、頭痛がすればよいと思ったりしたけれども、その日に限って虫歯一本痛みもしないのです。仕方なしにいやいやながら家は出ましたが、ぶらぶらと考えながら歩きました。どうしても学校の門を這入ることは出来ないように思われたのです。けれども先生の別れの時の言葉を思い出すと、僕は先生の顔だけはなんと見たくてしかたがありませんでした。僕が行かなかつたら先生は屹度悲しく思われるに違いない。もう一度先生のやさしい眼で見られたい。ただその一事があるばかりで僕は学校の門をくぐりました。<sup>ひとつと</sup>

そうしたらどうでしょう、先ず第一に待ち切っていたようにジムが飛んで来て、僕の手



を握ってくれました。そして昨日のことなんか忘れてしまったように、親切に僕の手をひいてどぎまぎしている僕を先生の部屋に連れて行くのです。僕はなんだか訳がわかりませんでした。学校に行ったらみんなが遠くの方から僕を見て「見ろ泥棒のつきの日本人が来た」とでも悪口をいうだろうと思っていたのにこんな風にされると気味が悪い程ほどでした。二人の足音を聞きつけてか、先生はジムがノックしない前に、戸を開けて下さいました。

二人は部屋の中に這入りました。

「ジム、あなたはいい子、よく私わたくしの言ったことがわかってくれましたね。ジムはもうあなたからあやまって貰もらわなくつてもいいと言っています。二人は今からいいお友達になればそれでいいんです。二人とも上手じょうずに握手をなさい。」と先生はにこにこしながら僕達を向い合せました。僕はでもあんまり勝手過ぎるようでもじもじしていますと、ジムはいそいそとぶら下げている僕の手を引張り出して堅く握ってくれました。僕はもうなん

と聞いてこの嬉<sup>うれ</sup>しさを表せばいいのか分らないで、唯<sup>ただ</sup>恥しく笑う外<sup>ほか</sup>ありませんでした。ジムも気持よさそうに、笑顔をしていました。先生はにこにこしながら僕に、  
「昨日<sup>きのう</sup>の葡萄<sup>ぶどう</sup>はおいしかったの。」と問われました。僕は顔を真<sup>ま</sup>赤<sup>か</sup>にして「ええ」と白状するより仕方ありませんでした。

「そんなら又あげましょうね。」

そういつて、先生は真<sup>ま</sup>白<sup>しろ</sup>なリンネルの着物につつまれた<sup>からだ</sup>体<sup>て</sup>を窓からのび出させて、葡萄の一房をもぎ取って、真<sup>ま</sup>白<sup>しろ</sup>い左の手の上に粉のふいた紫色の房を乗せて、細長い銀色<sup>はさみ</sup>の鋏<sup>まんなか</sup>で真<sup>ま</sup>中<sup>なか</sup>からふつりと二つに切って、ジムと僕とに下さいました。真<sup>ま</sup>白<sup>しろ</sup>い手<sup>て</sup>の平<sup>ひら</sup>に紫色の葡萄の粒が重って乗っていたその美しさを僕は今でもはっきりと思い出すことが出来ます。

僕はその時から前より少しい子になり、少しはにかみ屋でなくなったようです。

それにしても僕の大好きなあの子のいい先生はどこに行かれたでしょう。もう二度とは遇あえないと知りながら、僕は今でもあの先生がいたらなあと思います。秋になるといつでも葡萄の房は紫色に色づいて美しく粉をふきますけれども、それを受けた大理石のような白い美しい手はどこにも見つかりません。